

真言密教立川流研究ノート

松本 賀都子

はじめに

水原堯榮はその著『邪教立川流の研究』（1）の序で「人間性の研究によって人生の最勝樂を体験し、以って無味乾燥枯木にひとしき浮世に、莊嚴されたる現実生活の樂園をば如実に味はんとして生まれたる教説である」と立川流の教説を認めつつも、「その派の学者法匠が卑猥な陋劣なる邪義を弘通する者」と見られその教義が正しく評価されていないことを嘆いている。では、立川流とはいかなる流派であるのか、またその中のどの教説が邪流であると貶められているのか、またなにを根拠にそれを邪としているのか、さらに邪流とする事への疑問視などについて学匠たちの説を抜き出してみたい。

一、立川流のはじまりとその教え

*開祖

立川流の指彈書として名高い宥快（一三四五―一四一六）の『宝鏡鈔』には「一説ニ云フ醍醐三宝院ノ権僧ノ正弟子（僧正舍弟）仁寛阿闍梨（後蓮念）ト云フ人有リ、罪過子細有ルニ依リテ伊豆国ニ流被ル、彼ノ国ニ於テ渡世ノ為具妻俗人肉食汚穢人等ニ真言ヲ授ケ弟子ト為ス、爰武藏国立川ト云フ所ニ陰陽師有リ、仁寛ニ對テ真言ヲ習フ、陰陽法ヲ学ブ所ニ引入シ邪正混乱内外交雜ス、立川流ト稱シ真言ノ一流ヲ構ル、是邪法ノ濫觴也」とあり、頼瑜（一二二六―一三〇四）の『眞俗雜記問答鈔』にも「邪流ノ起リ勝覺ノ舍弟左大臣阿闍梨任寛、邪見ヲ被リ立川流ヲ起シ後ニ蓮念ト改メ、自夫來蓮念、兼覺、覺印、證鏤、覺明、如是ト相承ス」とあることから、立川流の創始者は仁寛であるとされている。開祖仁寛がその名を現したのは守山聖真の『立川邪教とその社会的背景の研究』（2）によると、永保三年（一〇八三）の『清滝宮御読経執事』に「仁寛阿闍梨歟」との記載が最初であるという。また立川流の大成者は、一般的には南北朝の時代、後醍醐帝の護持僧であった文観（一二七八―一三五七）ということになっているが、それについての検討はまだ多くの余地が残されている。

*宗格

金沢文庫に残される称名寺第二代住持釵阿が延慶・正和年間頃に書いた印信の切れ紙には、「立川流ハ半信ナリ半不信ナリ」とある。では、その宗格とは如何なるものであろうか。立川流の聖典類の殆どは、大成者である文観によって著されたといわれているが、千余巻にもものぼる著書は南北朝時代に活躍した東寺の杲宝

（一二〇六―一二六二）により焼却されている。さらに宥快は残存した立川流典籍を尋ね出してまでして焼却し、その撲滅をはかったといわれている。よって立川流を詳細に伝える資料は非常にわずかであり、残念ながらその宗格を定かにすることはできない。しかしながら、資料が極めて少ない中で水原は「立川流の宗格は人生々成の理法解決を密教教義上に求めて、当相即道即事而眞の妙諦は男女關係を外にして求め得べきものである」という解釈を下し、夫れに色々雑多の当時俗間に行はれていた陰陽術などを加へて、諸種の儀式作法を制定し、性の遂行のみを強要して以て即身成佛々道の根本義茲に存在せりとしていたのではなかったか」とその宗格を推測している。

*根本經典

心定の『受法用心集（亦名破邪帰正法抄）』（文永九年（一二七二））には「爰有邪法名内三部等、是則邪人妄説誑惑人作也」とある。三部とは瑜祇經、理趣經、宝篋印經を指し、これに菩提心論を加え三部一論とし、立川流の根本經典とされている。瑜祇經からは馬陰藏三摩地の文句を拠り所として性の研究題目とし、理趣經からは妙適清淨句の所説を以って男女の性愛を、さらに宝篋印經からは自身即佛双円の塔婆を説いて人間生成輪廻転生の玄奥を力説し、菩提心論からは三摩地段に於ける「八葉白蓮一時間、炳現阿字素光色、禪智俱入金剛縛、如来寂靜召入智」を取り上げ、男女両性の冥合する境界と説いている。水原は、立川流がこの三部一論を流派の根本教典としたことについて、「人生生活に於ける現象界の最大動機をなしている性の問題を以って宇宙の真理とする仏説中の仏説を力説するもので、未だ曾て他人の窺窺し得ざる妙諦である」と述べ評価して

いる。

立川流の書籍には『纂元面授』（文保二年（一一三一））に遍知院僧正成賢により筆録された師主覚洞院僧正勝賢の口授）が広範囲に引用され、また『纂元面授』自体が所々に所蔵されていることから、守山は「立川流では本書は重書であったことを認識する。…邪流の根本思想たるの観がある。…立川流の根本經典とも云える」と述べている。その『纂元面授』には不二門、本有思想、二根交会の清浄性、輪廻受生が説かれている。それについて守山は「理智冥合赤（丸）白（点）混和シテ魂（点）識中ニ托シテ所生不二ナルヲ大不二ト名ク、兩脉不存全一非二ナリ」で不二門が、「是本有而修生ニ非ズ也」「本有修生差別有ル可ラ不」で本有思想が、「理趣釈ニ云、瑜伽法ノ中ニ由、一念淨心相応スルニ依テ真如實際ヲ便証ス…由ニ瑜伽法中者、理智父母ノ（舍利蓮華）二根交会和合相応スルナリ。一念淨心相応ト者、理智不二シテ大智（父）大悲（母）互ニ余念無キ故ニ一念無二無三ト云フ。故ニ淨心ニ滯混和ト云フ。」で二根交会の清浄性が、「其ノ輪廻受生者ト定テ父母男女交会ニ依ル」で輪廻受生がそれぞれ説かれていることを説明している。

*教格

有快の『宝鏡鈔』に「其宗義者、男女陰陽之道ヲ以テ即身成仏之秘術ト為ス、成仏得道之法此ノ外ニ無シ、妄計ヲ作ス也。…大仏頂首楞嚴經ニ云フ、貪欲潛行シテ、口中ニ好デ眼耳鼻舌ハ皆淨土ト為シ、男女二根ハ即是レ菩提涅槃ノ真処ト言フ」とあることから、即身成仏への道は男女間の性行為をもつての外は無く、それがそのまま菩提涅槃の真処であるという教えが教格であろうことが推測される。さらに「男女陰陽之道ヲ以テ即

身成仏之秘術ト為ス」の理由付けのために阿吽字義、五鉗（人形杵）、呼吸観、避妊妊娠に関する見解、人間生育の原理、印明、即身成仏観、五色阿字などがたてられており、水原の『邪流立川流の研究』にはそれらについての説明が詳しくなされている。さらに特記すべきこととして、髑髏本尊を建立することがあげられる。その建立方法については心定の『受法用心集』に詳しく述べられている。

二、「邪流」と唱えた人々

*日蓮

最澄（七七七―八二二）の法勲を絶賛した日蓮が、空海（七七四―八三五）を邪見邪義者として排撃し真言亡国論を唱えたことは知られている。その日蓮が『星名五郎太郎殿御返事』（3）の中で、「佛ノ曰ハク悪象等に於ては畏る、心なかれ悪知識に於ては畏る、心をなせ。…故に畏ル可キハ大毒蛇悪鬼神よりも弘法善導法然等の流の悪知識を畏るべし」と法華経以外の教えはすべて悪知識であると非撃している。中でも真言宗への攻撃はさまざま、「彼真言等の流れ偏に現在を以つて旨とす。所謂畜類を本尊として男女の愛法を祈り莊園等の望をいのる。…是一切衆生の悪知識也、近力付クべからず畏ル可シ畏ル可シ。」と、立川流という言葉こそ出てきてはいないが、日蓮の時代にはすでにこの流派が巷に広く流布されていたことが窺える。

*心定

越後豊原寺の請願房心定は『受法用心集』（文永九年（一一七二））の卷上冒頭で「女犯ハ真言一宗ノ肝心即身成仏ノ至極ナリ。若シ女犯ヲヘダツル念ヲナサバ成仏ノ道遠カルベシ。肉食ハ諸仏菩薩ノ内証利生方便ノ玄底ナリ。若シ肉食ヲ嫌フ心アラバ、生ト死ヲ出ル門ニ迷ベシ」と立川流の教説を並べたて、このような教えを説く流派は邪流であると、厳しく指弾している。

*宥快

而二門を大成した宥快は『宝鏡鈔』の中で、「其宗義者、男女陰陽之道ヲ以テ即身成仏之秘術ト為シ、成仏得道之法此外ハ無ク妄計作ス也：大仏頂首楞嚴經ニ云フ、潜貪欲行ジ、口中ニ好ンデ眼耳鼻舌ハ皆浄土ヲ為シ、男女二根即是菩提涅槃ノ真処ナリト言フ、彼ノ無智者是穢言ヲ信ズル、此ヲ蠱毒魔勝惡鬼ト名ク、年老イテ魔ヲ成ジ是人悩乱スル、迷惑ヲ蒙リ無間業ニ墮スルヲ知ラ不、豈無間業ノ人ハ真言行者と名ズケン乎。」とその宗義者を破邪している。さらに「情文觀ノ形儀ヲ見ニ、頗ル直爾ノ事非ズ、律家ニ在リテ破戒無慚也、真言ニ入リテ三昧耶ヲ犯ス、正道ニ非ズ遁世ニ非ズ、既ニ是レニ途不摂之族也。武勇ヲ好ミ兵具ヲ蓄メ、：天魔變ジテ仏法滅スルカ、不審鬼神化シテ僧宝ヲ悩スカ、世ノ為法ノ為恐レル可シ慎ム可シ。」と文觀を激しく攻撃している。後の学匠たちはこの『宝鏡鈔』を拠りどころとし立川流を邪流であると決めているが、宥快は而二門大成者であるからして、不二門の立場にある文觀を考え方の違いから攻撃しているとも考えられはしまいか。宮坂宥勝は『密教の歴史』（４）の中で、「不二門は東寺、醍醐寺、あるいは根来の教学の中心をなすものであったから、宥快は而二門こそ空海密教の根本的立場であると確信して、而二思想を主張した」と述べている。こ

のように醍醐山座主、東寺の長者を歴任した不二門のエリート文觀と、而二門の大成者宥快との間で、互いのプライドを賭けての激しい弾圧合戦が繰り広げられていたということも考えられよう。となると、立川流指弾書である『宝鏡鈔』を読み解く場合も、書かれている文言だけで即邪流であるとの判断を下すのはいかがなものであろうか。南北朝争乱期の権力中枢に近い存在であった両者が南北両陣営に分かれ、しかも教学の中核を成す而二門・不二門の対立、それらをも含めたその時代の権力構造、政治的立場も無視することはできない。

*真鍋俊照

真鍋は『邪教・立川流』（５）の中で、宥快らによる批判の論点を「男女冥合の觀念と実践の基本となる金胎両部のとらえ方と、その觀念と実践の到達点を即身成仏としている点にある」と説明し、さらに「不二冥合が行為の中で男女二根交会と結びついたところに邪教とみなされる要因がある」と述べ、邪儀とされる教説についての説明を加えている。

*快成

快成の『邪正異解集』には、「邪流ハ法ノ甚深ナル由ヲ云ヒテ、赤白二滯ヲ両部ト号シ、此ノ二滯、冥合シテ生ル身ナレバ、所有所作ト談ズ、此レ極テ邪見也」とある。真鍋（５）によると、快成が『邪正異解集』の中で邪見としているのは高野山の中院御房龍光院方の一門が確立した本有思想であり、実践として行われる男

女冥合も自然の道理にゆだねられたものではなく、なんらかの目的（赤白二滯を両部とすること）を意識して行われるが故に邪見であるということである。このことから、快成も有快と同じく本有思想を邪見の根拠としている。

* 弘鑊

弘鑊も有快と同様に本有思想を邪見としている。源允という学僧が嘉歴三年（一三二八）に書写した『瑜祇瑜伽口伝』の註記に弘鑊の口伝批判文がある。真鍋（5）によるとその文の内容は、先師宝篋蓮道御房によるこの口伝は密教の微妙な悟りの証の部分としている本有・修生という概念を単純に男と女の関係にあてはめているがそれはまったく誤った解釈であると、弘鑊の批判文が書かれているという。

* 守山聖真

豊山派の守山は『立川邪教とその社会的背景の研究』（2）の中で、高野山の無量光院覚融の『不動尊愚鈔』を「此の書は凡てを男女陰陽の理を以て説明しておるので、邪教の羅網中に包摂しなければならぬものである」と述べ、不動明王の種子三形を説く「前刃修生金界、仏界、陽、男、始覚、智恵、後刃本有、台臓、生界、陰、女、本覚、理、定也、此生仏二界、陰陽、男女、総合成三昧耶劍、是則色赤白五大心息風識大依正一体不二表示也」の箇所を邪見であるとしている。また、覚融の弟子教雅が天文二十二年（一五五三）に著した『根吼鈔』については、その中の「六大四曼等建立之事」にある「二念父母和合、赤白互触、…赤白和合、五色即大曼荼羅也、

…男女二根五臓五色等、不二冥合是也、…」を挙げ、覚融から教雅への邪見相伝を証するものであるとしている。

また、知積院第二世能化となる祐宜が天正四年（一五七六）正月に蓮花院に於いて景巖大僧正より伝授を受けて筆録した『不動尊秘決一卷』は邪流的思想が豊富であるとし、その一説を紹介している。それを要約するに、不動明王を説き、制多迦、矜伽羅二童子を明かすために男女冥合の理を以て説いていることが邪流的であるとしている。さらに灌頂行儀が記述された祐宜の『許可秘伝鈔』（天正二年（一五七四））をあげ、「こうした露骨の説を根来蓮花院にて天正二年、三年、四年に亘って行っておる景巖大僧正なる人体は大僧正という緋衣の下にかくれた真教を毒する魔神とも見られ、これに随従して其の講説を聞いて端念に筆録した祐宜が後年涼しい顔をして京智積院第二世能化に納まったのも奇妙なものである」と両者を激しく指弾し、「このような露骨の講説が天正時代（一五七三―一五九一）に行われ、そうしてそれに書いてあるような灌頂が行われたとすれば、大変なことである」と酷評している。

さらに印融一派については「彼等は自分自身が赤白二滯和合不二するところが法の根源であると説きながら、それは邪流ではない、正当派の真言師であって、これこそ唯授一人の一大事であると自負していた。此の一人の人は三宝院勝覚の流れを汲んだ高野山無量光院の印融一派である」とし、すべてを男女冥合の理を以って説く露骨な講説をした景巖も、その弟子祐宜も勝覚（開祖仁寛の兄、東寺一長者、法務、醍醐寺座主、三宝院権僧正勝覚）の流れを継いだものであるとしている。

* 笹間良彦

笹間は『性の宗教』(6)の中で立川流の思想を「金胎両部の胎藏界は大日如來の眞実、理の世界で、金剛界は大日如來の現象や智の世界をあらわし相対的である。これを阿吽にあてはめさらに女と男の相対として見る」と解説し、「立川流が『般若理趣經』からすこぶる人間的な解釈を引き出し人間の本能を礼賛したごとく見える」と評価しつつも、「仏の教えという倫理観からは多分に牽強附会の感はまぬがれない」との批判を加え、さらに「阿吽の原理について説いたことは二元論的で間違つてはいないが、これをもって密教の中の代表的のものとした所に誤りがある」と述べている。

* 松長有慶

二元論については松長が『密教の歴史』(7)の中で「二種の原理の一元化を示すために、両性の合一をもつてする考え方は、知恵と方便、実在と現象、自己と仏との本質的な同一性の体得に導く目的をもつ。しかし日本では、両性を理と智の二元に配当し、六大思想にもとづく真言密教的な仏身觀の領域においてそれを理解している。日本における両性融合思想は邪教として焚書のうきめにあったため、その研究資料は少なく、いまだ解明されていない点が多い」と述べながらも、邪とされる根拠については「理と智の不二を示すのに男女両性をもつてたたえるため、それは邪教といわれる」と述べている。

* 仵遍

宝性院仵遍も、理と智の不二を示すのに男女両性の二根交会を以て示すという邪流に頭を悩ましていたよう、南院御房某で邪流が流行していることを慨嘆し、某に申し入れた書の中で「男女二根交会ヲ両部理智ノ内証至極之仏法ト談スル事、以ノ外ノ邪見也、惣シテ男女成姪ノ相ヲ委細ニ沙汰スルハ是第一邪流ノ法門也ト之知ル可シ」とそのことを批判している。

* 水原堯榮

水原は立川流が秘典とした『即身成仏口決』について、「即身成仏、即時而眞の眞理、このほかに覓め得べきなしと見て、正統密教にいふところの三種即身成仏の玄理を借用して巧に、現実の醜汚不潔なる性の一辺にのみ限るが如き偏見を高唱せるは寒心に堪えぬ」と、著書『邪教立川流の研究』(1)の中で酷評している。

* 無住

無住禪師の『沙石集』(弘安一二七八〜八八)の頃)には「近代真言ノ流ニ変成就ノ法トテ不可思議ノ悪見ノ法門多ク流布ス：諸法実相、一切仏法ノ詞、煩惱即菩提、生死即涅槃ノ文バカリヲトリツメテ、機法ノアワヒ解行ノワカレモ知ラズ、男女ヲ両部ノ大日ナンド習テ、ヨリアフハ理智冥合ナンドイヒテ、不淨ノ行、即密教ノ秘事修行ヲ習ヒ伝ヘテ、悪見邪念ステガタクシテ諸天ノ罰ヲ蒙ル」という文言がある。これを藤卷一保は『真言立川流』(8)の中で「立川流という言葉は出てこないが、これはまさしく立川流のことであろう」と述べ、この悪見の法門がいかにも広く流布していたかの説明を加えている。

三、邪流とすることへの疑問視

* 梅尾祥雲

「理智冥合、赤白混和」「二根交会和合相応」という言葉があるからという理由で邪書と決め付けるのはいかなものかと疑問を投げかけているのは、梅尾祥雲である。彼は古来から邪の根拠とされてきた文言を正しく検討すべきであるとし、立川流の根本教典であろうと推測されている『纂元面授』について『秘密佛教史』(9)の中で次のように述べている。「この書は『金剛頂経』などに於ける根本思想を如実に鼓吹したものであると共に、二根交会等の語は『般若理趣釋』を始め、『金剛頂経』の至る所に用ひられて居るのであるから、ただかかる語ある故を以て直に偽書と速断することは出来ないのである」と。さらに「いまその内容を一瞥するに、全く無限絶対の思想を基本とし、有限に即して無限絶対の当相を達悟するべきことを高調して居る」と述べ、『纂元面授』を簡単に邪書と決め付けるわけにはいかないとしている。

さらに醍醐の不二門教学の特徴について、「この絶対為本の教学は一種の劇業とも言ふべきもので、若し巧に之れを用ふると、如何なる難病をも治することを得ると共に、若しこの用法を誤り、これを扱ふにその人を得ないと、謂ゆる『表徳ぼこり』の学弊となり、延いては立川流の如き邪説ともなる可能性を多分に有するのである」と述べ、加えて「この理智事の三点説は絶対為本の醍醐教学を説明するに、最も適切なものであるけれども、悪くすると、赤白二滯の和合不二を基調とする立川流の邪説などに混ざる虞れがある」ことを指

摘している。

* 櫛田良洪

櫛田は『真言密教成立過程の研究』(10)の中で称名寺に現存する豊富な資料から、鎌倉時代にはすでに立川流の法門は成立していたことを明らかにしている。その中で特筆すべきこととして最古の印信(同寺開山長老審海のもの)を示し、「今日、その印信を調査して見ると、この頃には、後世指弾されるべき男女陰陽の思想を示す内容を発見する事は極めて困難である。…後世の如き赤白二滯の思想もすべて開示せられていないし、また、大曼荼羅思想を展開している所などにも、男女陰陽の思想を、些少なりとも含んでいなかった」ことを検証している。これは非常に注目すべきことである。今まで多くの学匠たちから邪の根拠とされてきた赤白二滯二根交会などの男女和合思想は、本来の立川流法門には存在していなかったとするのが正しい見方であるといえそうである。ではいつから、どのような経緯で邪儀が混入してゆき、ついには宥快、快成、杲宝をはじめとした学匠たちがこぞってその撲滅を謀らねばならない程の邪流となつていったのであろうか。

* 笹間良彦

鎌倉時代の最古の印信には男女陰陽の思想が認められないにもかかわらず、時代を経るに従って邪儀が問題となつていく経緯を、笹間は『性の宗教』(6)の中で次のように解説している。「室町時代末期には…修学未熟の山伏や修験者が立川流を承け、あるいは真似て大いに風俗を乱したため、いよいよ淫祠邪教として弾圧の

憂き目に遭い全く湮滅する」と。これは、梅尾が先に述べたように修学未熟のものが劇業とも言ふべき教学を扱ったために、その用法を誤り学幣で邪説と墮していったことを裏づける説であるといえよう

四、現代の視点から見た真言密教立川流

笹間は「現在では宗教色の全くない自由恋愛思想から立川流秘儀にも勝るとも劣らぬ性の自由化となり、さらに性産業とまでいわれる安易の性の享楽は、仁寛・文観があゝの世から現世を眺めたら何と云うであろうか」と述べ、守山は「立川邪流は女犯肉食を厳禁され、禁欲生活を強いられた時代の産物であり、生物としての人間の欲求が不均衡であった時の一現象であり、明治五年の僧侶の肉食妻帯蓄髪等勝手たるべしという太政官布告以後は、立川邪流を唱導する必要もなくなった」と述べている。つまり、性の自由化が実現した現代においては、もはや性は秘儀にはなり得ないというのである。

さらに藤巻は時代的な女性差別観の視点から、「女は罪穢れの権化のようにいうのが、まずはこの時代の世間一般の通念だ。月のものを穢れとし、妊娠・出産まで穢れとみなして別の産屋に移し、家の火が穢れるからといって、煮炊きの火まで別にした。こんな時代の中で、ここまで見事な説を立てた立川流は、邪教どころか性の解放者、先駆者といわねばならん」と、立川流の教儀を賞賛しているともとれる説を展開している。

まとめ

立川流のあらましとして、開祖は醍醐三寶院権僧正舎弟仁寛阿闍梨（名を現したのは一〇八三年）、大成者は南北朝の時代、後醍醐帝の護持僧であった文観（一二七八―一三五七）、宗格は性の遂行を以て即身成佛の道とされていたと推測されている。根本教典は瑜祇經、理趣經、宝篋印經、これに菩提心論を加えた三部一論。重書とされる『纂元面授』には、不二門、本有思想、二根交会の清浄性、輪廻受生が説かれている。教格は宥快の『宝鏡鈔』によると即身成仏への道は男女の性行為をもつての外は無く、それがそのまま菩提涅槃の真処であるという教えであり、それらの理由づけに阿吽字義、五結（人形杵）、呼吸観、避妊妊娠に関する見解、人間生育の原理、印明、即身成仏観、五色阿字などがたてられている。

何を以て邪儀とされているかという点に関しては、密教の悟りの証として重要な本有・修生という概念、あるいは理と智の不二冥合という概念を、男女二根の交会のみを以て説明している点にあるとされ、それらを邪と根拠づける背景には、仏教の倫理観や性的な行為に対する不浄観があると推測される。さらに加えて、時代的な背景も無視することはできない。立川流指彈書として知られている『宝鏡鈔』も、大成者文観個人を非難しているというべき内容であり、もともと政治的な意図を以て書かれた著書であることを踏まえての解釈が求められているといえる。

立川流を邪流とすることへの疑問として、まず、重書であろうと推測される『纂元面授』で高調されていることは、男女の和合ではなく無限絶対の思想を基本とし有限に即して無限絶対の当相を達悟することへの重要性についてであるという点。さらに鎌倉時代の立川流印信には、後世に指彈されるべき赤白二滯二根交会など